

ライフ・ヒストリー研究による 1960年代のロンドンと若者文化の考察

長谷川 倫 子

はじめに

近代における若者文化の歴史において1960年代は大きな変革期の一つであり、この時代特有の文化が創出された。1960年代の欧米の主要都市では、学生運動の機運が高まり、新しい価値観を持った若者世代が台頭し、それまでの既成概念を覆し、新しい風俗やライフスタイルを作り出した。英国でも例外ではなく、とりわけ首都ロンドンでは若者たちが考え出した斬新なファッションやポピュラー音楽は世界中から注目された。半世紀が経過した現在、1960年代のロンドンに花開いた新しい文化が、歴史的にはどのような意義を持つのだろうかと考えたのが、この研究の出発点であった。なぜならば、その流行は遥か遠い極東に位置する日本の若者たちにも波及したからである。

1960年代の若者文化研究の流れのなかでも特筆すべき特別企画展が、2016年9月から2017年2月にかけて、ロンドンのサウス・ケンジントンにあるビクトリア・アンド・アルバート博物館 (Victoria and Albert Museum) で開催された。“YOU SAY YOU WANT A REVOLUTION? —RECORDS AND REBELS 1966-1970”と銘打たれたこの展示は、英国のレコード・コレクターの所有していた1960年代のLPジャケットを一次資料として用いることで、1960年代に様々な分野にまで波及していった欧米の若者文化革命を振り返るものであった¹⁾。

1960年代とはいうものも、この10年間に起きた現象をひとくくりにして議論するのは無理がある。音楽メディア史の視点としては、EP版全盛期の1960年代前半に多くのポップ音楽²⁾が生まれ、コンサート会場、トランジスタラジオやテレビ、ジュークボックス、レコード店などでそれらの楽曲を楽しむ十代の若者たちの様子だけではなく、新しい若者世代のファッションや振る舞い方までもが注目を集めるようになった。

この展示で焦点が当てられていた1960年代の後半のポピュラー音楽の世界では、芸術表現の可能性を広げたLP版の普及により、ポピュラー音楽の世界は新たな局面を迎える。LPレコード用のアルバム製作によって、作詞・作曲家たちは設定したテーマに沿った楽曲を何曲も組みこむことができるようになり、またジャケットのデザインそのものにもこだわりを持つ歌手やグループが現れ、楽曲そのものの質に加えてジャケットデザインまで、その

芸術的な価値を評価されるようなLPアルバムも登場するようになった。

この新しい時代の流れを牽引したパイオニアたちは、独自の世界観を持ち、その斬新さやオリジナリティが爆発的なブームを生み出す魅力ではあったものの、一般大衆の熱狂と注目の獲得はまた、近代の大衆社会では避けて通ることのできない商業主義といかに折り合いをつけるかというディレンマも意味していた。この展示の下敷きにはザ・ビートルズがこんな状況へのアンチ・テーゼを込めた〈レボリューション (Revolution)〉³⁾という楽曲が用いられていた。これは、1960年代の若者文化革命が進展するうちに、当初の理想とはかけはなれた方向へと向かうことを余儀なくされたものもあり、この展示は、この点についても見逃してはいなかったことも特筆に値するだろう。この展示に登場したトピックは、ミニスカートなどに代表される1960年代のファッション、ザ・ビートルズが牽引しウッドストックに至るまでの音楽シーン、マイノリティの権利拡大、ベトナム戦争反対運動、ヒッピー現象、ドラッグ、クレジットカードがもたらした消費スタイル、環境問題意識の高まりなどにまで及び、1960年代の一部の若者間で沸き起こった社会的なムーヴメントが、やがては他の人びとの価値観や世界観にまで及ぶさまを、広範にわたって扱うものであった。

中でもとりわけ目を引いたのは、展示室の最初の部屋に飾られていたマーガレット・ミード (Margaret Mead) による「市民のなかから出てきた高い意識を持った少数の若者が世界を変えたであろうことは疑う余地のないことである」という言葉であった。1960年代のロンドンに興隆した若者文化のうねりは、瞬く間に社会全体を覆いつくし、その時代に身を置いたものは、世代を超えて新しい文化による地殻変動を感じずにはいられなかったことを、ミードはこの表現に残している⁴⁾。

筆者が参与観察を行ったところ、この展示の入場者は、当時を懐かしがる世代のみにとどまらず、幅広い年齢層にわたっていることは明らかであった。2016年におけるこのような展示の商業的な成功は、この時代に作り出された新しい文化が、時空をこえて多くの世代から関心を集めていることを示すものである。しかしながら、たとえ当時の資料が残されていても、実際にその時代のその場所に身を置いた者たちの思いを直接知ることはできない。本論はオーラル・ヒストリー研究の視点から、1960年代のロンドンに吹いた新しい文化の風を体感したものへの聞き書き調査による検証を試みるものである。

オーラル・ヒストリー研究は、送り手固有の語りに潜む様々な社会的なコンテキストに目を向ける研究方法であるが、一個人の記憶力には限界があること、調査対象者の語りから得た知見が個人の体験や主観に依拠するところから、得られた知見を社会科学的に一般化できるかどうかという課題（時には限界）を抱えている。また、語り手と聞き取る側が作り出す密接な関係性は共同思考の空間を構築し、結果として得られた叙述の客観性に影響する側面もある。さらにそれ以上に深刻なのが、実際にストーリー・テラーとしての協力を取り付けた調査対象者がその研究テーマにとって適切な情報提供者であるかどうかという点と、そのよ

うな対象者を見つけ出すことですら容易ではないということである。しかしながら、メディア史研究においても、文章化された記録や視聴覚などのアーカイブスからは得られない一次資料収集の一つの手段として、一定の有効性は評価されている⁵⁾。

本研究における調査対象者たちは「スウィング・ロンドン (Swinging London)」⁶⁾ と呼ばれた時代にロンドンに在住し、当時の社会を覆った若者文化のうねりを直接体験したも のたちである。聞き書き調査、すなわち、まさにその時代を生きた人の「ストーリー・テリング」を通して、それぞれの体験した1960年代のロンドンはどのようなものであったのかを検証し、さらにその語りの中に潜む社会的なコンテクストを読み解くことによって、1960年代の若者文化興隆は何を意味していたのかを問うのが本論の意図するところである。

第1章 先行研究

まず、本研究の出発点として示唆を与えてくれるのが、ブルデュー (Bourdieu [1986 = 1979]) の「文化資本」の概念である。ブルデューの考える文化とは、資産として個人が所有する文化的な価値のあるものや、学歴・資格などの獲得に加え、日常の実践によって身体化した個人のありようも含んだ総体的なものを示し、これらの文化的な資産は、その獲得に個人の社会的背景が密接にかかわるものである。ブルデューはまた、その再生産においても、「文化資本」は、経済資本の分配構想と密接な関係を持つものであるとしている。このブルデューの考えは、十代の頃に体験した若者文化革命をオーラル・ヒストリーの視点から検証することを意図した本論における出発点となった。1960年代の若者文化は、戦後における高等学校への進学率の増加やテレビ受像機やトランジスタラジオの普及に見られるような、社会生活がより便利で豊かな暮らし向きへと変わること、大衆文化の消費者でもある中流の若者世代が出現したこととも大きく結びつくものであり、1960年代の若者革命はこのような若者たちの文化資本獲得のプロセスでもあったと言えるだろう。

サベージ (Savage [2004]) は、戦後の英国の若者のサブカルチャーに着目し、同じ服装のスタイルを身にまとうばかりか、集団をなしてロンドン市内の一定の場所に群れながらテリトリーを確保し、ふるまい方や儀礼的な慣習行為まで共有していたそれぞれの時代の若者集団である「族」に着目し、その変遷を紹介している。

サベージが紹介するこれらの「族」の中で、本研究に関連のあるものは、まず貴族風のEdward調のファッションをまとい1950年代に登場した「テディ・ボーイズ (Teddy Boys)」をあげることができるだろう。さらに、1960年代中旬には、そのテディ・ボーイズに飽きた「モッズ (Mod)」たちが登場する。彼らが着目したイタリアン・ファッションを英国特有のスタイルにアレンジしたこのモッズ達のファッションは、この時代のロンドンの若者のファッションを代表するものとなり、それらはまた海外の若者たちにも多大な影響をあたえた。

またボヘミアン思想とエリート主義の奇妙な融合が作り出した「ヒッピー (Hippies)」(サベージ, 82頁)も1960年代の若者たちのありようを物語る「族」のひとつである。

ヘブディジ (Hebdige [1997=1979])は、これらの「族」の登場によって派生した英国の若者文化は、その階級制度と移民文化に負うところが大きいとしている。それぞれの「族」に所属する若者たちの音楽、ファッション、ヘアスタイル、政治、ドラッグ、ダンスなどの文化活動や嗜好性を、彼は「スタイル」と呼び、仲間たちと同じようなファッションをまとい、同じような振る舞いや嗜好性を共有する集団に見られるものをサブカルチャーとした。たとえそれがごく平均的な人から見て並外れてユニークなものであり、社会体制への抵抗をアピールするものであるかのような印象を抱かせるものであっても、いかなる「スタイル」もやがては、文化産業による商品へと変換される運命にある。また、その集団の特殊性ゆえのレッテル張りとのせめぎ合いも避けて通ることはできないであろう。ヘブディジは、これらすべてを内包しながらも、従来の要素がハイブリッド化された成果として新たなサブカルチャーが派生することに、新しい文化創出の意義を見出している。

第2章 1960年代のロンドンと若者文化

1960年代のロンドンの若者文化革命は、ポピュラー音楽なしに考えられない。中でも当時のロンドンをベースに新しい音楽を作り出したザ・ビートルズ (The Beatles) の果たした役割ははかり知れない。リバプールで結成されたこの四人編成のバンドは、前年のレコード・デビューに続き、1963年1月12日に発売されたシングル・カットの〈プリーズ・プリーズ・ミー (Please Please Me)〉から、常にヒットチャートのトップを独占し、1964年にはアメリカ進出をきっかけに世界的な人気グループとなり、1960年代後半には、数々のLPアルバム制作を通じてオリジナルの楽曲を芸術作品の領域にまで昇華させたことで、今日においても高い評価を得ている。⁷⁾

1950年代中頃に誕生したロック音楽は、黒人の音楽であるブルースを白人が演奏することで始まった新しい音楽のジャンルであるが、その確立に貢献したローリング・ストーンズ (Rolling Stones) も、ビートルズと同様、1960年代のロンドンの音楽シーンを牽引した⁸⁾。また、フォークやバラードの伝統を受け継ぎ、今日では21世紀の吟遊詩人としてその文学的な価値も評価されているボブ・ディラン (Bob Dylan) も、1950年代までにはなかった新しいスタイルの音楽を、自らの手で作り出した一人である。ボブ・ディランはアメリカの歌手であったが、デビュー後間もない時期からロンドンに来て演奏活動を行っていた。⁹⁾

英国やアメリカのヒットチャートのトップに上り詰めた後、世界中にファンを獲得した欧米のシンガー・ソング・ライターやグループは、やがては音楽業界全体のビジネスモデルまでも変えたばかりではなく、英語のポピュラー音楽を愛する者たちによるグローバルなフ

ファン・コミュニティも形成した。ロンドン発のポピュラー音楽は、かつては栄華を極めた大英帝国時代の威光も消え去った英国にとって、数少ない輸出産業の一つとなり、ひいては英国のイメージアップにも貢献した¹⁰⁾。それは、レコード会社やラジオ・テレビ放送局の戦略が功を奏した商業的な成功の賜物ではあったものの、ロンドン発のポピュラー音楽が、英国以外のファンたちの余暇活動やその後の人生にまで与えた影響ははかり知れないものがある。

それではなぜ、1960年代のロンドンであったのだろうか？ ポピュラー音楽を例に考えてみよう。まず思い浮かぶのは第二次世界大戦後のアメリカナイゼーションである。戦時期には英国に駐留するアメリカ軍関係者向けの娯楽施設が英国人にとってアメリカのポピュラー文化の窓口になったばかりでなく、同じ英語文化圏という文化的な距離 (cultural proximity) の近さもその浸透を容易にした。ザ・ビートルズを例にとると、メンバーたちが生まれ育ったリバプールは大西洋航路の船が必ず立ち寄る港だったこともあり、地元の音楽ファンたちは、アメリカでリリースされたばかりの楽曲に加え、カントリー&ウエスタンやリズム・アンド・ブルース、フォークやジャズのジャンルの楽曲など、幅広いジャンルのポピュラー音楽を聴く機会を持つことが出来た。本に残されたインタビュー形式の彼のバイオグラフィーによれば、ジョン・レノンも、アメリカの音楽を聴きながら育った経験を語っている¹¹⁾。

ラジオやテレビの普及に加え、各家庭でのレコードの繰り返し再生を可能にしたレコード・プレイヤーの普及もポピュラー音楽の普及に拍車をかけた。1960年代に繁華街に多くあったレコード店はジュークボックスの置かれたカフェと同様、地元の若者が集う場となった。新しい購買層としての英国の若者たちは、文化産業のターゲットとなり、新しい文化の普及が促進されることになった。

さらに、1950年代に英国で流行したスキッフルというジャンルの音楽の影響も特筆に値するだろう。英国で誕生したロックバンドがアメリカを足がかりに、グローバルな展開をめざし、1960年には世界制覇まで実現させたのが英国のポピュラー音楽であるが、1960年代の躍進のための揺籃期が、このスキッフルの時代であった。ロック音楽が世界中で初めて認知された記念すべきビル・ヘイリー (Bill Haley) らの楽曲〈ロック・アラウンド・ザ・クロック (Rock Around the Clock)〉が席卷していた1955年の秋、ロンドンでは、ソホー (Soho) のジャズ・クラブ出身の、ロニー・ドネガン (Lonnie Donegan)¹²⁾ というポップ歌手が、英国の若いポピュラー音楽ファンの中で一大ブームを巻き起こした。このスキッフルを生みだしたソホーは、ロンドンでもユニークな地域で、1950年代には珍しかったライブ演奏を聴きながらイタリア式のコーヒーを飲むことができるカフェやジャズの生演奏を聴けるクラブなどが先駆けて誕生した地域でもある¹³⁾。ビッグ・バンドをバックにソロシンガーが歌うというスタイルから、ギターなどの楽器演奏も出来る歌手が小編成のグループで

オリジナルの楽曲を提供するというスタイルへと移行するうえで、英国独自のスキッフルは1960年代のバンド・ブームの時代へと貴重な橋渡しの役割を果たしたと言えるだろう。

音楽とは異なる分野であるが、若者たちのエネルギーが疾風怒濤のように英国で爆発した1960年代の先鞭となった演劇作品が、1956年に誕生する¹⁴⁾。本研究で紹介する最初の調査協力者にとって、この作品こそ、今思い起こせば、ロンドンの若者文化革命時代の幕開けであったと位置づけることのできる作品であるという¹⁵⁾。

当時30代になっていた調査協力者にとっての1960年代のロンドンは、すでにキャリアの方向性も定まり、結婚して子育ての最中であったこともあり、騒がしかったという記憶しかない。当時は自宅の目と鼻の先にレコーディング・スタジオがあり、レコーディングにやってくるアイドル歌手を待ち受ける女子たちの歓声に加え、1960年代後半には、隣接したフラットに、あるギタリストとその家族がアメリカから引っ越してきた。ごく平均的な英国人が穏やかな日常生活を送っている住宅街で、騒音だけでは留まらない彼らの傍若無人ぶりには困り果てたというエピソードをお聞きした。今は伝説となっているロック・ミュージシャンとその一家による喧騒は、ウッドストックにまで出演した才能を英国のレコード会社に見いだされてロンドンにやってきたものの、そのギタリスト本人がドラッグの過剰摂取で亡くなったあと、レコード会社から提供されていたそのフラットからその遺族たちが転出していくまで続いたという。

調査協力者が衝撃を受けたという前出の演劇作品は、衰え行く大英帝国の焦燥感を描きながらも、既成の権威や制度への感情をぶつけるさまを描いたジョン・オズボーン (John Osborne) の『怒りを込めてふりかえれ (Look Back in Anger)』である。アイリッシュのジミーと中流家庭出身のアリソンのカップルにウェールズ人のクリフという同居人のフラットで繰り広げられるごく日常的な週末のやりとりから始まるこの作品は、1956年5月にロイヤルコート劇場で初演されて以来、外国語にも翻訳され話題となり、当時は「怒れる若者たち」という流行語まで作り出されたという。この初演を鑑賞した調査協力者は「まさに新しい時代の幕開けを実感した」と語ってくれた。

政府高官だった父親の仕事の関係でパブリック・スクールを卒業するまでインドで育った調査協力者は、戦後に一緒に帰国した父親を通じて当時の英国の置かれた状況を肌で感じ取っていた。たとえ、かつてのような輝きを亡くした英国であっても、世界中から集まった素材を調和させて新たなものを作り出すという能力と周縁の者たちの発するエネルギーが融合することで生み出すオリジナルな英国の文化は、他の国の追従を許さない。大英帝国の黄昏と深く結びついた1960年代の英国の若者文化革命の出発点はこの劇作品から始まったというのが彼の持論である。

ザ・ビートルズのメンバーの一人であるジョン・レノンは、1970年の12月に行われたインタビューの中に、示唆に富むコメントを残している。このインタビューは、1970年の4

月にビートルズの解散が決定的なものとなり、ジョン・レノンたちが新しい音楽活動の場所としてニューヨークを選び、その年の末に移り住んだ直後に実施されたものである。その内容はザ・ビートルズ解散までの回想が中心となっているものの、その中の「1960年代の若者文化革命が何をもたらしたのか？」という問いに対して、確かに中流の若者の表象的なファッションや嗜好性を変えたかもしれないが、英国の階級制度やブルジョアなどの上の人たちが支配するという社会構造は何も変わっていないと、ジョンは述べている¹⁶⁾。1970年代初頭のインタビューでもあり、政治的なメッセージを一貫して訴え続け、音楽を通じてより良い社会の実現を目指したいという強い使命感を抱いていたジョン・レノンならではのコメントである。

1960年代に出現した新しい若者文化は、英国社会をどう変えたのかについては、議論の分かれるところではあるものの、ロンドンをベースに活躍したパイオニアたちがその担い手になったことは明らかである。

第3章 聞き書き調査協力者と1960年代のロンドン

1960年代のロンドンで、新しい文化興隆の波を体験したものにとって、これらの経験はいかなる意味を持っているのだろうか？ 二人目の調査協力者として、1960年代にロンドンで十代の日々を過ごした女性への聞き書き調査を実施した¹⁷⁾。彼女は1947年にロンドン市内で生まれた。専門職の父親と母、兄とともに、夏のバカンスなどは家族4人でフランスに車で出かけるといったような、ロンドンの郊外の一戸建てに住み、週末には繁華街に出かけたりするといった、当時の英国では中流のライフスタイルを享受することのできる家庭環境の中で育った。

(1) 1950年代

1950年代の出来事の中で調査対象者にとって最も印象に残っている出来事は、1953年6月2日のエリザベス2世の戴冠式のテレビ中継であった。当時6歳であった調査協力者は、その時の様子を今でも記憶しているという。

ウエストミンスター寺院で厳かに行われたこの儀式に臨むエリザベス2世とエディンバラ侯爵の様子は、まるでおとぎ話を見ているかのようであった。その荘厳な雰囲気の中、8000人の列席者を前に、連合王国とコモンウェルスに君臨する新しい女王の誕生を宣言するこの式典は厳粛に執り行われた。この式典はまた、お祝いムードに包まれる英国国民に対しては、自分たちがどの国よりも優れているという優越感を感じさせてくれるものであったとハットン (Hutton, [2015]) が述べているように、史上初のテレビ中継による戴冠式は英国の人びとが後で振り返った時に、最も印象に残るメディア・イベントの一つである¹⁸⁾。

1936年11月に開始されたテレビ放送（白黒）は、1939年の第二次世界大戦の勃発により中断され、1946年に再開された。英国におけるテレビ受像機の普及率を見ると、1955年の普及率は35パーセントで、テレビ受像機が英国のほとんどの家庭に行き渡るのは1970年代であった¹⁹。それでも、テレビ中継された戴冠式が国民的なメディア・イベントになり得たのには、英国で普及していたレンタル・テレビというサービスも貢献したようである。調査対象者の周辺の家庭では、テレビ受像機を購入するよりも、レンタル業者から数か月単位で受像機を借りるというサービスの方が人気であったという。英国に若い女王が誕生する瞬間をテレビが初めて伝えた国民的メディア・イベントを、6歳の彼女も家族とともに3か月間レンタルしたテレビで視聴した思い出を語ってくれた。

(2) トランジスタラジオとラジオ・ルクセンブルク

持ち運びが可能で、個別にラジオ番組を楽しむことを可能にするトランジスタラジオが、英国において一般家庭の手の届く価格となるのは、1950年代後半からであった。英国内で1960年代のポピュラー音楽が若者層に浸透するうえで最大の功労者であったトランジスタラジオは、1960年代になるとあまねく普及し、1963年までに販売されたラジオの36パーセントは、日本からの輸入品であった²⁰。

調査協力者のトランジスタラジオは、1960年に13歳で迎えたクリスマスに両親からプレゼントされたものであった。当時の英国の若者と同様、調査協力者はトランジスタラジオを通じて多くのポピュラー音楽と出会い、このインタビューにおいても、この頃に聞いた様々な楽曲についての彼女ならではのエピソードを聞くことができた。彼女がよく聴いていたラジオ放送局は、当時英国で最も人気のあったラジオ・ルクセンブルク（Radio Luxemburg）であった²¹。

英国のラジオ放送は、戦後になっても、1927年に創設されたBBC（British Broadcasting Corporation）の圧倒的な影響下にあった。初代会長（Director General）となったジョン・リース（John Reith: 1889-1971）のプロテスタントの理想論をベースとした放送理念は、後のBBCの番組編成にも徹底されており、その番組内容は、公共放送であるBBCが英国の人びとにとって適切であると判断したものに限定された。地方の方言やロンドンのイーストエンドの人びとの話す言葉であるコクニー（cokney）は当然のこととして、パブやミュージック・ホールに集う人たちのごく一般的な言葉遣いでさえ、BBCの放送に登場することはなかった²²。

このような状況下において、より親しみを持てる身近な娯楽を求めている英国のリスナーのニーズに応えたヨーロッパのラジオ放送局の一つが、ラジオ・ルクセンブルクであった。ラジオ・ルクセンブルクは1930年代の初頭から英語放送を開始し、多くの英国のリスナーは、そのバラエティー・ショーやダンス番組にラジオのダイヤルを合わせた。とりわけ日曜日に

は「安息日厳守主義」を尊重し、宗教的理念と知性尊重主義に則ったBBCの番組に対抗して、終日にわたりバラエティ番組を編成したラジオ・ルクセンブルクの躍進は後のBBCの番組の大衆化にも少なからず影響を与えた。BBCが1936年に実施したラジオリスナーの調査でも、大衆の好みに応えた「軽番組」を放送するラジオ・ルクセンブルクの圧倒的な人気は報告されており²³⁾、この人気は1960年代初頭も継続しており、調査協力者にとっても、ラジオ・ルクセンブルクは、ロンドンの自宅の勉強部屋においても自らがポピュラー音楽のファン・コミュニティの一員であることを実感させてくれるラジオ放送局であったという。

1960年代のポピュラー音楽の普及において、テレビで放送された音楽番組も大きな役割を果たした。ポピュラー音楽やそのスターたちの演奏や歌唱風景をビジュアル情報で知らせてくれたテレビの若者向け音楽番組と、調査協力者との接点について検証するために、当時の代表的な若者向けの音楽番組について視聴した記憶があるかどうか尋ねてみた。ITVが1963年8月9日から1966年12月23日まで放送した“レディ・ステディー・ゴー (Ready Steady Go)”を調査協力者は記憶していないものの、BBC1が1964年1月1日から2006年の7月30日まで放送した、ミュージック・チャート形式の番組である“トップ・オブ・ポップス (Top of the Pops)”は覚えているとのことであった²⁴⁾。

(3) ポピュラー音楽

調査協力者にとってもザ・ビートルズのデビューは印象に残る出来事であったようだ。調査協力者はザ・ビートルズのレコード・デビューを以下のように回想した：

1962年のザ・ビートルズのデビューも良く覚えています。(彼らの楽曲である)〈ラブ・ミー・ドゥ (Love Me Do)〉も良かったのですが、最初に印象的だったのはザ・ビートルズ (The Beatles) というグループ名の斬新さでした。一度耳にしたら絶対忘れないこのグループ名が印象的だったのを覚えています²⁵⁾。

ザ・ビートルズは、1963年1月12日にプリーズ・プリーズ・ミー (Please Please Me) がリリースされた直後の1963年1月18日には、ラジオ・ルクセンブルクの“フライデー・スペクター”という番組に出演している。そしてその一か月後の2月18日に、この曲はビートルズの曲としては初めて英国のヒットチャートの一位を獲得する²⁶⁾。

1960年代に登場したローリング・ストーンズの楽曲も彼女は好んで聴いていたという。バンドの演奏スタイルの斬新さから、当時はローリング・ストーンズの方がよりおしゃれだと思ったが、長い年月を経て今聞き返してみると、ローリング・ストーンズはアメリカの黒人ブルースのコピーだと思ふようになり、今はいつ聞いても色あせないザ・ビートルズのオリジナリティを高く評価するようになったという。インタビュー当時、70歳の誕生日を迎

えたばかりの調査協力者であったが、十代の頃に出会った両者の楽曲をこれまで繰り返し聞くことでとり着いた現在の心境をこのように語ってくれた。

彼女のこのようなポピュラー音楽への嗜好性はいつから始まったのだろうか？ 今となつては記憶の鮮明な部分が拠り所でもあり、明確にいつからということは確定できないものの、調査協力者は、1950年代の後半にはポピュラー音楽に関心を持っていたことが確認できた。1950年代の楽曲で一番印象に残っているのは、当時最も人気のあった、エルビス・プレスリーの楽曲に加えて、ザ・ビートルズが登場するまではアイドルとして最も人気のあったクリフ・リチャード (Cliff Richard) が1969年に大ヒットを飛ばした楽曲であったという：

クリフ・リチャードの〈リビング・ドール (living doll)〉²⁷⁾ という楽曲が大好きでした。今振り返ってみると、この曲は女性蔑視の曲で、好ましくないと思いますが、当時は何ら問題にもならなかったし、(私自身も) 楽しい曲だと思っていました。

1960年代に盛んになった女性解放運動を牽引した一人が、グロリア・スタインム (Gloria Steinem)²⁸⁾ であるが、調査協力者はケンブリッジで開催された彼女の講演会に行ったばかりとのことで、過去に好きで聴いていたヒット曲を、インタビューの折には、再評価しながらもなつかしさがっていた。1960年代からのフェミニズム運動の成果として男女平等が当然のこととなっている今の価値観から、調査協力者はこの楽曲に込められたメッセージを、ノスタルジアだけではなく、テキストの中に潜む性差別意識を読み解きながら回想していた。

1970年代以降も、調査協力者にとって音楽は楽しみの一つとなった。彼女の好みの音楽のジャンルはその後、ブルースやジャズにも広がりを見せるようになった。モータウン・サウンド²⁹⁾ に憧れるようになり、それぞれのアーティストによって醸し出される黒人音楽特有の世界に身を置くことも楽しみの一つとなった。彼女が列挙してくれた好みのアーティストは、レイ・チャールズ (Ray Charles)、ジョー・リー・フーカー (Joh Lee Hooker)、マディ・ウォーターズ (Muddy Waters) などであった。

1960年代に若者だった調査協力者の世代にとって、フォーク音楽も1960年代の空気を思い起こすうえで重要なジャンルである。調査協力者は、好きなアーティストの中に、1960年代のアメリカの公民権運動で活躍したフォーク歌手のジョーン・バエズ (Joan Baez)³⁰⁾ やボブ・ディランも挙げている。彼女が現在居住しているケンブリッジは、アメリカのフォークソングライブに貢献した演奏家たちを英国に連れてくることを意図して、1965年からフォーク音楽の祭典であるケンブリッジ・フォーク・ソング・フェスティバル (The Cambridge Folk Festival)³¹⁾ が開催された場所であり、このフェスティバルの最初の年には、調査協力者の好きなポール・サイモン (Paul Simon)³²⁾ が出演している。しかしながら、調査協力者がこのケンブリッジ・フォーク・フェスティバルに参加したのは、ずっと後の事で

あり、また、彼女の記憶にあるのは混雑していたことくらいで、あまりこのイベントは印象に残っていないという。

(4) ミニスカート

1960年代の英国発のファッションで最も世界の若者の共感を得たものとは問われれば、マリ・クワント (Mary Quant) のミニスカートをまず誰もが思い浮かべ、そのミニスカートをはいたツイギー (Twiggy) はスウィング・ロンドンの代名詞と誰もが認めるだろう。1967年 (昭和42年) にマリ・クワントとツイギーが来日し、日本でもミニスカートが爆発的なブームとなった³³⁾。その時の様子を佐藤 (1997) は以下のように書き記している：

ビートルズ、モッズに次ぐクワント、ツイギーの登場は、イギリスの若者の“意識革命のエネルギー”が根底にあることを認識させ、世界の若者だけではなく、大人も注目した。ミニスカートは日本でも若者だけではなく、大人の間でも大流行になっていた (145頁)。

佐藤はまた、伝統を重視する堅苦しいイメージの英国における若者の旧弊打破のエネルギーが注目を集めたこともあり、日本では当時の首相夫人までミニスカートを採用したと述べている。その時期を地方都市に住むティーンエージャーとして過ごした筆者自身もまた、街中を歩く女性たちのスカートが1960年代後半ごろに一齐に短くなっていったのを記憶している。筆者にとっても、学校の制服から解放される週末の私服に、ミニスカートは必須アイテムの一つであり、最も短かったスカートの丈が45センチであったことも記憶している。

その流行の発信源であるロンドンにいた調査対象者にミニスカートについて記憶していることを尋ねたところ、彼女はロンドンの十代の女子の中でも比較的早い時期からミニスカートを着用し始めたと同様に回想してくれた：

サウス・ケンジントン (South Kensington) の歯医者さんに通っていたので、その帰りにオープンしたばかりのBIBAのブティックに立ち寄っていました。ミニスカートをはくようになったのも早かった方だと思います。

1960年代当時、ロンドンに住んでいた若者の中でも、最新流行のオリジナル作品に直接触れることのできる女子は多くなかったはずである。当時の最新流行の発信地に近いサウス・ケンジントンが生活圏内にあったということは、「文化資本」の継承は特定の家族によってのみ継承され再分配されるというブルデューの概念を示唆するものである。

調査協力者がしばしば立ち寄り、最新流行のミニスカートを購入したというBIBAがブティックを開店したのは1964年の9月であった。ミニスカートのパイオニアであるマリ・

クワントがロンドンに最初の店舗を開店したのは1955年で、当初の売り上げは低迷していたものの、1960年代に入ってミニスカートが欧米で飛ぶように売れたおかげで、マリ・クワントのデザインは売り上げを伸ばした。BIBAは、1960年代に入って、十代の女子でも入手可能な廉価な服を置くことでミニスカートのさらなる普及に貢献した。調査協力者が歯科治療に出かけていたサウス・ケンジントンは1960年代の中頃から1960年代中旬に次々とブティックが産声を上げたスローン・ストリート (Slone Street) から徒歩圏内の場所であった。また、調査協力者は、1960年代ファッションの店が集中していたカーナビー・ストリート (Carnaby Street) でパンツを購入したことも語ってくれた³⁴⁾。

(5) 学生生活

1964年に、調査協力者は大学に進学し、3年間で終了した後、さらに美術大学に入学する。彼女が大学に在籍していた頃、ロンドンも学生運動の渦中にあり、とりわけ彼女の在籍した大学は学生運動がさかんであった。1968年3月17日にベトナム戦争反対のために行われた抗議行動のデモ (Grosvenor Square)³⁵⁾には参加した記憶があるものの、調査時点の彼女にとって、学生運動の思い出には、なんら懐かしさを覚えるものはないとのことであった。当初は世の中を良い方向に変えるという青年たちの描く理想的な社会の実現という理念を共有して始まったものであったものの、討論会などではいつまでたっても結論が見つけれそ
うもない空論の応酬だと感じたことくらいしか印象に残っていないとのことであった。

それでも、彼女にとって美術学校への進学は、後に奨学金を得ることで実現した海外留学へとつながり、美術史の講師としてカレッジの教壇に立つまでのキャリア・パスの礎となった。

1960年代に彼女がロンドンで経験した若者文化革命は、その後の調査協力者の生き方や嗜好性の形成に寄与しただけでなく、彼女の1960年代は、ブルデューの「文化資本」獲得の出発点であったことをも示唆している。

おわりに

かつてロンドンが、「スウィングング・ロンドン (Swinging London)」と言われた1960年代に、同時代体験として若者文化の興隆を目のあたりにした人たちの語りを通じて、当時の若者文化革命を読み解くというのが本研究の試みであった。

2016年度に国外研究の機会をいただいたが、この年はまた、サウス・ケンジントンにあるビクトリア・アンド・アルバート博物館 (Victoria and Albert Museum) で、“YOU SAY YOU WANT A REVOLUTION? —RECORDS AND REBELS 1966-1970”という

1960年代のロンドンの若者文化革命を再評価する特別展が開催された年でもあった。博物館長によるギャラリー・トークを含め、この展示を鑑賞するためにビクトリア・アンド・アルバート博物館には複数回にわたり足を運んだ。この特別展がロンドンにおける1960年代の若者研究の出発点となったことは、幸運なスタートであった。さらに、聞き書き調査に理想的な調査協力者たちと出会うことで、オーラル・ヒストリー研究の視点からこのテーマに取り組むことが実現した。

本論でとりあげた2名の調査協力者は、1960年代をそれぞれ三十歳代と十代のティーンエージャーとして迎えている。同じ時代と同じ場所で文化現象を体験したものであっても、それぞれのライフ・ステージや環境などによって受け止め方は異なっていたものの、両者に共通項として見出されたのは、1960年代のロンドンは刺激と喧騒に満ちていたという感想であった。

また、それぞれの若い頃の文化体験は、その後人生の嗜好性にも影響を与えており、このケースも、ブルデューの概念である「文化資本」の概念の有効性を示唆するものであった。また、約50年を経た今でも調査協力者たちの記憶に残る出来事については、2016年におけるそれぞれの立ち位置から当時を振り返り、自分なりに再評価を行うとともに、ライフ・ヒストリーの流れの中でそれぞれが意味付与を行っていたのは興味深かった。

本論では、2016年度の国外研究中に実施したインタビュー協力者たちの中の2名のみのデータを用いたが、ここで取り上げることが出来なかったその他の人たちのストーリー・テリングの叙述についても、別の機会に研究成果として発表したいと思っている。また、今後さらに新たな方へたちへのインタビューも重ねることで、歴史研究で最も必要とされる断片の積み重ねによる研究のより一層の緻密化を目指したい。

注

- 1) 英国の博物館は基本的には入場料が無料となっているが、有料で何かのテーマに焦点をあてたこの特別展示は視覚展示と音声表現を一体化させる試みとしてビクトリア・アンド・アルバート博物館が始めたシリーズの第2弾で（第一弾は2013年に開催されたデビット・ボーイ展であった）、見学者は1960年代を代表する楽曲やテレビ・コマーシャルや解説などの音声ガイドとともに鑑賞できるという斬新な展示方法であった。また、この特別展示はザ・ビートルズがその楽曲〈レボリューション (Revolution)〉に込めた1960年代の文化革命へのアンチ・テーゼを下敷きにして構成されていた。
- 2) ここではオリジナルな楽曲による活動を含めた広い意味での大衆音楽に関連する活動に対して「ポピュラー音楽」という名称を用いた。また、シングルカットのレコードの楽曲で人気を博したアイドル歌手によって歌われる楽曲には「ポップ音楽」という名称を使用することとした。
- 3) 〈レボリューション (Revolution)〉今のような状態だったら仲間から自分を外してほしい……“You can count me out…in”という歌詞が示すように、社会変革の達成が容易ではないことへのジョン・レノンのアンビバレントな思いが込められている。ジョン・レノン&ポール・マツ

カートニー作、1968年リリース。この曲は二つの異なるスタイルでレコーディングされ、リリースも別に行われた。最初にリリースされたのはシングル盤（裏面は〈ヘイ・ジュード (Hey Jude)〉で、ハードロックのスタイルで演奏されている。もう一曲はアルバム *The Beatles* の中に所収されたもので、タイトルも〈レボリューション1 (Revolution 1)〉とされ、テンポも異なっている。テレビ番組では、“Frost on Sunday” (1968年9月)と“The Smothers Brothers Comedy Hour” (1968年10月)に出演し、演奏を披露している。Friede, Goldie, Robin Titone, and Sue Weiner *The Beatles A to Z* (Methuen, 1980) 180頁。

- 4) マーガレット・ミード (Margaret Mead: 1901-1978) はアメリカの文化人類学者。展示されていた “Never doubt that a small group of thoughtful committed citizens can change the world” を筆者が翻訳。その他にも、1960年代の若者文化革命に示唆や影響を与えた知識人たちとして、リチャード・ホガート (Richard Hoggart), オスカー・ワイルド (Oscar Wild), トマス・モア (Thomas More), マーシャル・マクルーハン (H. Marshall McLuhan), レイチェル・カーソン (Rachel L. Carson), エドガー・アランポー (Edogar Allan Poe), ジョン・ケネス・ガルブレイス (John Kenneth Galbraith) 等がこの展示では紹介されていた。
- 5) 2017年9月に開催されたメディア史研究会の2017年度研究集会での以下の講義を参考にした。ここで有山は、オーラル・ヒストリー研究は、現存する資料の不足を補完するためには有効な手段ではあるが、その研究の困難さだけでなく、この言葉の意味でさえ未だ確立されていないことを指摘した。歴史学では1970年代ごろからメディアから疎外されている人びとや声なき民衆の歴史を掘り起こす試みとしてはじまり、また社会学では生活史研究の一つの方法としてライフ・ストーリーを社会学の視点から問い直す方法として確立されている（これには自伝や日記なども含まれる）。オーラル・ヒストリー研究では、送り手固有の語りを素朴に受け止めるのではなく、そこに紛れ込んでいる様々な社会的なコンテクストに目を向けることが求められる。

有山輝雄「読者・視聴者（オーディエンス）の方法としてのオーラル・ヒストリー」メディア史研究会2017年度研究集会（第276回月例研究会）配布資料55-66頁。2017年9月2日（土曜日）ホテルアジア会館にて開催。

- 6) アメリカの雑誌タイム (Time) が、1966年4月15日号のカバー・ストーリーとしてロンドンに起きている若者文化現象を紹介して以来、この「キャッチフレーズ」が世界中に認知されるようになった。
- 7) 1961年にリバプールで結成された4人のグループ。1962年10月に英国でデビューし、1964年にはアメリカのテレビ番組「エド・サリバン・ショー」に出演し、アメリカ公演の成功で世界的なスターとなる。1970年4月に解散するまでの8年半の間、革新的なアルバムを発表し、ポピュラー音楽のトップスターとして君臨した。岡部迪子編『ポピュラー・スター事典』（水星社、1976年）42頁。
- 8) 1964年に結成された英国のロックバンド。1960年代はロンドンをベースにザ・ビートルズと肩を並べる人気グループとして、1960年代のポピュラー音楽シーンのトップに君臨した。岡部迪子編『ポピュラー・スター事典』（水星社、1976年）57-58頁。
- 9) 1961年にスターを夢見てニューヨークに出てフォーク音楽に興味を示すようになり、1960年代にアメリカで盛り上がった公民権運動におけるプロテスト・ソング・ライターの代表として高い評価を受ける。1970年代以後も、シンガー・ソング・ライターとしてのアメリカのフォ

- ーク音楽やヨーロッパで歌い継がれてきたバラードなどの伝統を受け継いだ楽曲を歌い続け、2016年にはノーベル文学賞を授与された。岡部迪子編『ポピュラー・スター事典』（水星社、1976年）112頁参照。ボブ・ディランは1962年12月にロンドンのキングス・クロスにあるウォーター・ラッツ（Water Rats）というライブハウスで英国デビューを飾ったとされている（ウォーター・ラッツのホームページ <http://thewaterratsvenue.london/history.html>）が、もう一つの現存するライブハウス（Troubadour, Old Brompton Street）でも、1960年代の初期にライブ演奏をしたことが紹介されている。
- 10) 欧米のポピュラー音楽のグローバルな展開については Burnett, Robert *The Global Jukebox: The International Music Industry* (Routledge, 1996) が参考になる。日本における1960年代のポピュラー音楽によるグローバルな文化圏形成を検証した研究例としては以下の研究を参照。Hasegawa, Tomoko “Cultural Transfer of the Western Popular Music in Japan: A Case study of Midnight Radio Programs for Youth in the Late 1960s” Paper Presented at the IAMCR 2016 Conference in Leicester, UK Popular Culture Working Group.
 - 11) ジョン・レノンを例にとると、リバプール時代にはアメリカのカントリー・アンド・ウエスタンを聴いていたと語っている。また、先達としてエルビス・プレスリー (Elvis Presley), チャック・ベリー (Chuck Berry), リトル・リチャード (Little Richard) などに敬意を表すコメントを行っている。ジョン・レノン／片岡義男訳 前掲書 104, 262頁。
 - 12) Shuker, Roy *Popular Music: The Key Concepts* (Routledge, 1998) 273-274頁。和田栄司『ブリティッシュロックの歴史』（ブロンズ社、1973年）6-21頁。
 - 13) Hutton, Mike *Life in 1950s London* (Amberley, 2015) 227-234頁。
 - 14) ジョン・オズボーン／青木範夫訳『怒りをこめてふりかえれ』（原書房、1973年）= Osborne, John *Look Back in Anger* (Faber & Faber, 2005), 福田隆太郎「『怒れる若者たち』について」ジョン・オズボーン／青木範夫訳『怒りをこめてふりかえれ』（原書房、1973年）201-213頁参照。日本では1959年（昭和34年12月）に文学座のアトリエ公演として上演され話題を呼んだ。
 - 15) 2016年10月15日インタビュー実施。1934年生まれ。著名な建築家の一人で、1960年代から現在も、ロンドン市内の同じ家に居住している。大学時代の同級生に1960年代以降カーナビーストリートで活躍したデザイナーもいる。
 - 16) ジョン・レノン／片岡義男訳『ビートルズ革命—ジョン・レノンの告白』（草思社、1972年）10頁。雑誌「ローリング・ストーン」のヤーン・ウェーナーがインタビューを行っている。英語版は Jann S. Wenner *Lennon Remembers: The Full Rolling Stone Interview from 1970* (Verso, 2000) 参照。
 - 17) 調査協力者は、ケンブリッジ在住で、2015年までカレッジで美術史を教えていた。インタビューの日時は2016年12月17日（ケンブリッジ）、12月30日（ケンブリッジ）、2017年2月15日（ロンドン）の合計3回実施した。2月15日のインタビューでは、前出のビクトリア・アンド・アルバート博物館（Victoria and Albert Museum）の“YOU SAY YOU WANT A REVOLUTION? —RECORDS AND REBELS 1966—1970”を一緒に鑑賞し、そのちにインタビューを実施した。また随時メールのやり取りを行い、フォローアップも継続している。彼女の両親はドイツによるオーストリア合併（1938年3月13日）の前に、かろうじて国外脱出が出来たユダヤ系オーストリア人であった。父親が若いころにロンドンで教育を受けていたこ

ともあり、ナチス・ドイツから逃れた際の受け入れ国として英国に来ることが出来た。第二次世界大戦後も両親は英国に留まり、ロンドンに居をかまえ、そこで終生を過ごした。

- 18) Hutton, Mike *Life in 1950s London* (Amberley, 2015) 55-58 頁。
- 19) 安東伸介他編『イギリスの生活と文化事典』(研究者出版, 1992年) 570 頁。Obelkevich, James and Peter Catterall eds. *Understanding Post-War British Society* (Routledge, 1994) 145-146 頁。
- 20) ラジオの普及率については Obelkevich, James and Peter Catterall eds. *Understanding Post-War British Society* (Routledge, 1994) 146 頁, トランジスタラジオについては Street, Sean *Historical Dictionary of British Radio Second Edition* (Rowman & Littlefield, 2015) 330-331 頁参照。
- 21) 1933年にルクセンブルクで開局した商業ラジオ放送局。戦時中には一時放送を中断するも、戦後は再開し、1946年には英語放送を始め、1960年代の英国のリッスナーからの高い支持を得る。Street, Sean *Historical Dictionary of British Radio Second Edition* (Rowman & Littlefield, 2015) 275-276 頁。
- 22) Hutton, Mike *Life in 1950s London* (Amberley, 2015) 33 頁。
- 23) 蓑葉信弘『BBC イギリス放送協会 パブリック放送サービスの伝統』(東信堂, 2002年) 46-50 頁。BBCでは「ポピュラー音楽」という名称ではなく、クラシックやオペラのような伝統的な西欧音楽に含まれない大衆的な音楽に対して「軽音楽」(light music)という呼称を用いている。
- 24) “レディ・ステディー・ゴー”に関しては Levy, Shawn *Ready, Steady, Go! — The Smashing Rise and Giddy Fall of Swinging London* (Broadway Books, 2001) を, “トップ・オブ・ポップス”に関しては, Humpheries, Patrick & Stieve Blackneill *Top of the Pops—50th Anniversary* (McNidder Grade, 2014) を参考にした。
- 25) 〈ラブ・ミー・ドゥ (Love Me Do)〉ジョン・レノン&ポール・マッカートニー作, 1962年10月5日にリリースされたザ・ビートルズの英国でのデビュー曲。1964年のエド・サリバン・ショーでも演奏された。Friede, Goldie, Robin Titone and Sue Weiner *The Beatles A to Z* (Methuen, 1980) 134 頁。
- 26) 香月利一編・著『ビートルズ事典』(立風書房, 1974年) 42 頁。
- 27) 1959年5月にリリースされた。ビートルズ登場前の1950年代を代表するアイドル歌手クリフ・リチャードの最初のバラード曲。ヒットチャートで初めてトップになった曲でもあり、ミリオンセラーを達成した。和田栄司『ブリティッシュロックの歴史』(ブロンズ社, 1973年) 42 頁。Richard, Cliff *My Life, My Way* (Headline Review, 2008) 34 頁。
- 28) 1960年代のアメリカのフェミニスト運動のリーダー。
https://en.wikipedia.org/wiki/Gloria_Steinem
- 29) 1959年に、ベリ・ゴードイ (Berry Gordy) によって、アメリカ合州国のデトロイトで設立された黒人音楽専門のプロダクション。低音の響くバックに、黒人らしい外見のボーカルがビートを効かせたリズムミカルな唱法で、時にはダンスも交えながら歌うスタイルが白人の若者たちに受け入れられ、多くの黒人歌手のスターを輩出した。ゴードイは白人のファン層をアメリカ国外にも拡大させることを設立当初から目指した。Shuker, Roy *Popular Music: The Key Concepts* (Routledge, 1998) 193-194 頁。

- 30) アメリカのフォーク歌手。1959年のニューポート・ジャズ・フェスティバルでデビューして以来活動を続けている。「反戦歌手の女王」、「フォーク音楽の女王」と呼ばれるように、1960年代のフォーク音楽のトップに君臨した。岡部迪子編『ポピュラー・スター事典』（水星社、1976年）117頁参照。
- 31) Bean, JP *Singing from the Floor: A History of British Folk Clubs* (Faber and Faber, 2014) 157頁参照。
- 32) 1964年にデビューしたアメリカのフォーク・ロック・デュオであるサイモンとガーファンクル (Simon & Garfunkel) のメンバー。含蓄のある歌詞と完成されたサウンドで1960年代を代表するグループとなった。岡部迪子編『ポピュラー・スター事典』（水星社、1976年）105-106頁参照。
- 33) ミニスカートの日本における認知獲得には、当時パリのオートクチュール界で活躍していたアンドレ・クレージュも重要な役割を果たしたという。オートクチュールにミニスカートを持ち込み完成させたクレージュは1966年に日本におけるミニスカート普及の先鞭者であった。佐藤嘉昭『若者文化史』（源流社、1997年）145頁。
- 34) BIBAに関しては、長澤均『BIBA Swingin' London 1965-1974』（ブルースインターアクションズ、2006年）を参照した。1960年代にオリジナル作品を販売するブティックが集中していたスローン・ストリート (Sloane Street) とカーナビー・ストリート (Carnaby Street) については、Old House Books& Maps *Gear Guide 1967* (Old House, 2013) が参考になる。
- 35) この抗議行動の様子は以下のURLが参考になる。Abhimanya Manchanda “1968, Grosvenor Square – that’s where the protest should be made”
https://www.marxists.org/history/erol/uk_secondwave/grosvenor-square.pdf#search=%27Grosvenor+Square+protest%27

参考文献

〈邦文〉

- 有山輝雄「読者・視聴者（オーディエンス）の方法としてのオーラル・ヒストリー」メディア史研究会 2017年度研究集会（第276回月例研究会）2017年9月2日 配布資料55-66頁。
- 香月利一編・著『ビートルズ事典』（立風書房、1974年）
- サベージ、ジョン／岡崎真理訳『イギリス「族」物語』（毎日新聞社、2004年）
- 佐藤嘉昭『若者文化史』（源流社、1997年）
- ジョン・レノン／片岡義男訳『ビートルズ革命—ジョン・レノンの告白』（草思社、1972年）= Jann S. Wenner *Lennon Remembers: The Full Rolling Stone Interview from 1970* (Verso, 2000)。
- 長澤均『BIBA Swingin' London 1965-1971』（ブルースインターアクションズ、2006年）
- 林邦雄『そのとき僕はそこにいた 戦後ファッション盛衰史』（源流社、1982年）
- ブルデュー、ピエール／福井憲彦訳「文化資本の三つの姿」『acteas』1号、1986=原著出版1979年）
- ヘブディジ、D／山口淑子訳『サブカルチャー スタイルの意味するもの』（未来社、1997年）= Dick Hebdige *Subculture: The Meaning of Style* (Methuen & Co Ltd, 1979)

ライフ・ヒストリー研究による1960年代のロンドンと若者文化の考察

蓑葉信弘『BBC イギリス放送協会 パブリック放送サービスの伝統』（東信堂，2002年）

和田栄司『ブリティッシュロックの歴史』（ブロンズ社，1973年）

〈英文〉

Andrew, Crisell “Broadcasting: Television and Radio” Jane Stokes and Anna Reading eds. *The Media in Britain: Current Debates and Developments* (Macmillan Press LTD, 1999) Chapter 4: Pp. 61-73

Brookes, Victoria and Geoffrey Marsh *YOU SAY YOU WANT A REVOLUTION? RECORDS AND REBELS 1966-1970* (V&A Publishing, 2016)

Godfrey, Donald G. *Methods of Historical Analysis in Electronic Media* (Lawrence Erlbaum Associates Publishers, 2006)

Hasegawa, Tomoko “Cultural Transfer of the Western Popular Music in Japan: A Case study of Midnight Radio Programs for Youth in the Late 1960s” Paper Presented at the IAMCR 2016 Conference in Leicester, UK: Popular Culture Working Group

Hutton, Mike *Life in 1950s London* (Amberley, 2015)

Marsh, Madeleine *Collecting the 1960s* (Miller’s, 1999)

Obelkevich, James and Peter Catterall eds. *Understanding Post-War British Society* (Routledge, 1994)

Shuker, Roy *Popular Music: The Key Concepts* (Routledge, 1998)

Simonelli, David *Working Class Heroes—Rock Music and British Society in the 1960s and 1970s* (Lexington Books, 2013)

Street, Sean *Historical Dictionary of British Radio Second Edition* (Rowman & Littlefield, 2015)

Weight, Richard *MOD!* A Very British Style* (The Bodley Head, 2013)

〈URL〉

Youth Culture by Katie Milestone: 18 December 1999, *The Guardian*

<https://www.theguardian.com/theguardian/1999/dec/18/weekend7.weekend5>

付記及び謝辞

本研究は、2016年度国外研究員として派遣していただいた英国ロンドンの東洋アフリカ研究学院（School of Oriental and African Studies=SOAS）日本研究所（Japan Research Centre=JRC）の客員研究員時代に実施した研究調査の成果報告の一部である。このような機会を与えてくださった東京経済大学及びSOASに、またインタビューにご協力いただいたロンドン在住とケンブリッジ在住のお二人には心から感謝の意を表したい。